

長谷川泰と慶応義塾

——福沢諭吉との接点を中心に——

志村 俊郎¹⁾, 都倉 武之²⁾

¹⁾日本医科大学 医史学研究会, ²⁾慶応義塾福沢研究センター

受付:平成25年1月9日/受理:平成25年8月23日

要旨:本稿は、長谷川泰と慶応義塾の関係を明らかにするものである。

私立済生学舎の創立者である長谷川泰と、福沢諭吉の創立した慶応義塾の関係については、従来全く知られていない。しかし泰は、明治36(1903)年に慶応義塾から卒業生相当の資格である特選塾員に選ばれている事実がある。

本稿では長谷川泰が慶応2(1866)年頃慶応義塾に在籍したことを新資料から考証する。

さらに、その当時泰が在籍していた医学所は、大坂適塾の主宰者緒方洪庵に連なる人脈を有しており、それが福沢諭吉と関係の深い人脈と重なり合いながら、泰と福沢・慶応義塾とを結んでいたと考えられることを論じる。

また福沢と長谷川の、学問観、文部行政に対する長年にわたる対抗などの思想的近接性にも言及したい。

キーワード:長谷川泰, 福沢諭吉, 済生学舎, 慶応義塾, 医学所

はじめに

長谷川泰(天保13<1842>-明治45<1912>)は、私立医学校である済生学舎を明治9(1876)年4月に創立、明治36年8月までの28年にわたって経営して多くの医師を育成し、また明治31年より35年まで内務省衛生局長を務めて長与専斎、後藤新平に続き日本の公衆衛生行政の推進に尽力したことなどで知られる。

泰に関する先行研究を概観すれば、その生涯を関係者が記録した基本的な文献に、長谷川泰遺稿集刊行会『御塘遺影』(1934)、山口梧郎『長谷川泰先生小伝』(1935)、山口梧郎編『長谷川泰先生全集』(1939)などがある。しかし小伝以外の二者は断片的な資料集であり、小伝は多くの資料を駆使しつつも、必ずしも緻密な考証には踏み込んでいない。

戦後には、日本医科大学同窓会史料収集委員会

編『こころの母校—済生学舎小史—』(1986)、唐沢信安『済生学舎と長谷川泰』(1996)が、泰の生涯と済生学舎の歩みを医学史的側面に重きを置いて丹念に追った。神谷昭典『日本近代医学の定立—私立医学校済生学舎の興廃』(1984)は、従来医学史上の、あるいは医学教育史上の評価対象に限定されがちであった長谷川泰の生涯及び済生学舎の歩みを、医学史の政治史的側面に重点を置いて分析した重要な研究で、「明治の近代医学史は、一方では帝大、陸軍による“国家の医学”の医学界におけるヘゲモニーの確立であり、他方では“国民の医学”の挫折と敗北の歴史であった」と結論づけた¹⁾。

しかしいずれの先行研究も、概して医学史、医学教育史の範疇で語られ、法学、経済学、文学といった文系の学問の発達と諸学校の興廃をめぐる政治史的側面への検討と、完全に別個の問題として検討されている。神谷が指摘する「国家」(官

立)と「国民」(私立)の、学問・教育の領域における対峙は、医学のそれと、それ以外の領域とで、相互に横断的に考察する視点が乏しかったのではないか。

例えば、日本における私立学校の展開に大きな影響を与えた慶応義塾は、「明治十年以来、私立学校中ただ一校の特例をもって」兵役免除の特典を得ていたが、文部省による「私学の圧迫」を意図する明治16年末の徴兵令改正によりその特典を剥奪され、その回復は明治29年になったと『慶応義塾百年史』に記述されている²⁾。しかし済生学舎が、明治20年10月に私立医学校の立場で特権を求める願書を出していることは、十分考慮されていない³⁾。そのほか、同書中では済生学舎への記述が一箇所もみられない。これは日本における近代私立学校中での慶応義塾を捉える上では、いささか視野狭窄のそしりを免れないとも思われる。

本稿は長谷川泰が慶応2年に、まさにその慶応義塾に入門していたことを考証し、泰と福沢とを結ぶ人脈、またその思想的近接の精査の必要性の問題提起を試みるものである。

1. 慶応義塾特選塾員としての長谷川泰

長谷川泰が慶応義塾と深い関係を有したことを示唆する文献に明治42(1909)年に刊行された『慶応義塾出身名流列伝』(以下『名流列伝』)がある(図1)。この本には泰が、「慶応義塾出身」の一人として写真入りで略歴を掲載されている。

泰は「元内務省衛生局長、済生学舎長」の肩書で、その人となりを紹介されており、奇言奇行に富む「怪傑」「天保の頑爺」などと形容されながら、「解剖学に於ては天下一品、英仏独に亘りて広く政治経済歴史に迄亘り、頭脳又極めて組織的にして最も数理に明か也」として、国際的であらゆる分野に卓越した能力を有していた学識を高く評価されている。またその知識を自在に活かしつつ、衆議院議員として、また衛生局長として、さらには済生学舎廃校後の市井の一老人として、官界を批判して已まない生涯であることを次のようにユーモラスに描いている。

氏今や古稀に垂せんとするも意気悪罵、例によりて盛ん也。言は投げ出す如く、烟草の吹殻は膝の上に落つるに任せ、侃々諤々として本郷元町の堂々たる邸宅に住し、五万五千巻の書中に起臥して世を罵倒しつゝあり。

高い学識と、反骨的精神が泰の特徴として紹介されていると要約できよう。しかし本文中で泰が義塾に学んだ時期などの具体的記述は一切ない。この本に泰が掲載されていることはどのように解釈すべき事実であろうか。

同書の凡例には「慶応義塾出身者中の名流を選抜して之を伝記したり」とあり、さらに「約二万の卒業生中より、四百八十名を選抜したる標準は、一に之を現在の社会的地位に執りたり」と記されている⁴⁾。すなわち泰も慶応義塾の「出身者」「卒業生」として扱われ、その「名流」と認められていることになる。

『名流列伝』への掲載は、泰が慶応義塾に学んだことを直ちに示すわけではない。

この『名流列伝』という本は、その立派な装丁や表題から一見慶応義塾の公式編纂物のようなのであるが、三田商業研究会の名義で実業之世界社より出版された一般の商業出版物である。また、発行代表者は、慶応義塾商業夜学校に学んだ野依秀市である⁵⁾。彼は後に政財界の腐敗を辛辣に批判するなど独自の姿勢で言論活動を展開したことで知られるジャーナリストであるが、この時は24歳の若さであった。これらの事実は、この本が今日学術的な資料として用いる上で、必ずしも十分な厳密性を伴っていないことを示唆する。

さらに重要な点は、慶応義塾において「卒業生」の考え方に複雑な歴史があり、「塾員」という独特の概念が存在することである。同塾は創立以来数回にわたって経営危機に陥った経験があり、特に明治13年に福沢が経営を断念して廃塾を宣言したことを契機に、少しずつ安定的な維持のための組織が整えられていった⁶⁾。この学校の維持を望む人々が資金を寄せ合い、協力者に広く経営への参加権を与えるという、財団法人に近い、共同で運営する結社としての仕組みであり、慶応義塾

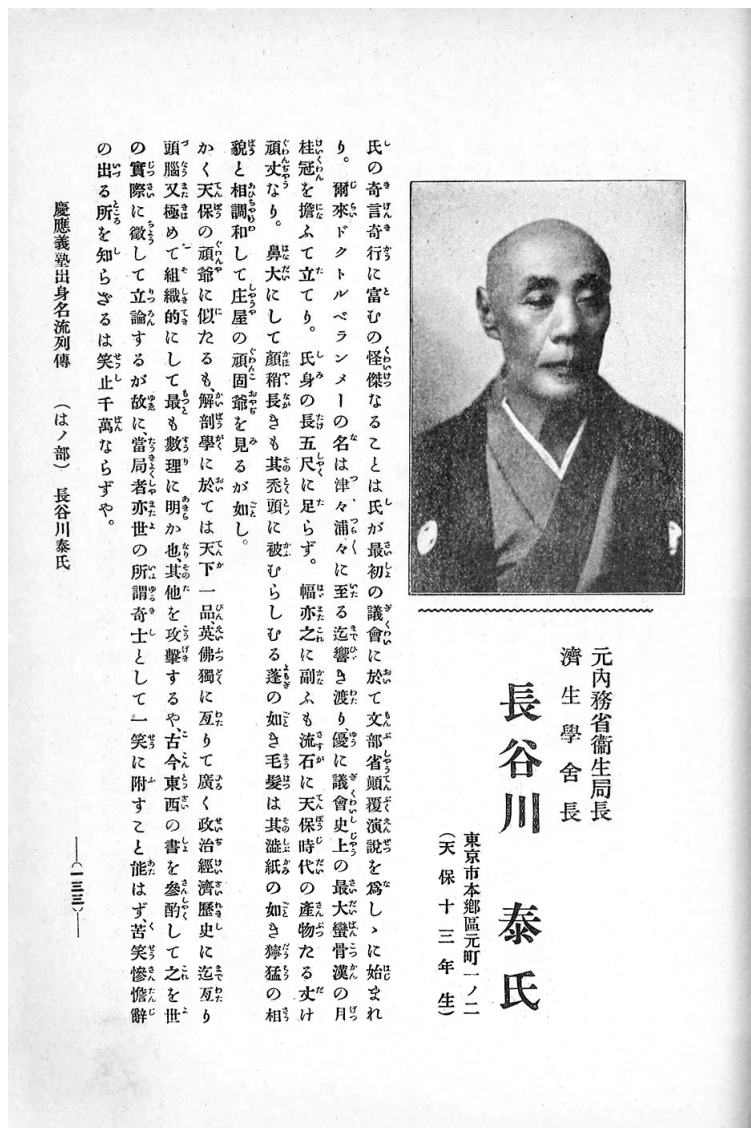


図1 『慶応義塾出身名流列傳』掲載の長谷川泰略歴

ではそこに参加する者全体を「社中」と呼び、現役の学生・生徒である「塾生」と、「塾員」と呼ぶ人々をその主要な構成員と位置づけた。義塾を維持することに協力する意思のある者を「塾員」と名付けて生涯捕捉しておくことを制度化して、運営資金の確保と安定的運営を企図したわけである。この「塾員」が問題である。

法人としての慶応義塾の寄附行為に当たる「慶応義塾規約」(明治22年制定)の第3条に、「慶応義塾卒業生ト、社頭ノ特選セル者トヲ以テ慶応義

塾々員トス」との規定がある。その塾員全員に、慶応義塾の最高議決機関である評議員会を構成する評議員の選挙権、被選挙権が与えられ(第4条)、塾の経営に参加する権利を与えた。つまり「塾員」には、一定の課程を終えて卒業証書を得た卒業生だけでなく「特選塾員」と呼ばれる人々を含み、彼らにも卒業生と全く同等の権利を与えたのである。

この特選塾員は、例外的な稀な存在ではなく、かなり多数存在していた⁷⁾。例えば、小幡篤次郎

(福沢没後の義塾第2代社頭)、門野幾之進(義塾教頭・副社頭を歴任、千代田生命創立者)、莊田平五郎(義塾第5代評議員会議長、三菱の大番頭と呼ばれた実業家)、阿部泰蔵(義塾第6代評議員会議長、明治生命創立者)、犬養毅(首相)、尾崎行雄(衆議院議員)などはいずれも慶応義塾出身者として近代史上に名を留めるが、みな特選塾員である。彼らは慶応義塾に「卒業」という制度ができる明治7年以前に塾に在籍していた者が、制度ができたあとまで在籍したものの中途退学をしてしまった者である。上記の人物はいずれも、明治23年に初めて塾員が特選された際、義塾当局が選定し、本人の承諾を得たうえで「特選塾員」に選ばれた⁸⁾。

それだけではなく、全く義塾に学んだことがない人物でも、教師として教壇に立ちその理念を理解している者や、慶応義塾の教育理念に共鳴する者で積極的にその普及に関与している者も、本人の承諾の上で「塾員」に特選された。

大学部文学科の教員を務め、『三田文学』創刊にも貢献した森林太郎(鷗外、明治43年特選。以下カッコ数字は特選年)、永井莊吉(荷風、大正2<1913>年)、北里研究所から医学部創設時の教員となった北島多一(大正9年)、秦佐八郎(大正11年)、加藤元一(大正11年)、法学部の教壇に立った三淵忠彦(後の初代最高裁長官、大正9年)、芦田均(後の首相、昭和17<1942>年)などはその典型例である。

さらに、義塾に学んでいないだけでなく、教員でもない人物でも塾員になっている例が見られる。ジャーナリストの土屋元作(明治32年)は幼少期に父の影響で福沢の思想を嫌悪して義塾に学ばなかったと明言しているが、やがて福沢の真意に共鳴し福沢が社主である新聞『時事新報』の記者となり、福沢が最晩年に編纂した「修身要領」に深く関与するなど福沢思想の普及に尽力した人物である⁹⁾。日米貿易の開拓者として知られる森村市左衛門、新井領一郎(共に大正2年)は、福沢の実業論の影響を強く受け、それを実践したとされる貿易商社森村組の実業家である。また北里柴三郎(大正2年)は、ドイツ留学から帰国後、

福沢の多大な援助により研究環境を与えられ、のちに義塾医学部創設に尽力したが、特選時は内務省伝染病研究所所長であった。

塾員の特選は、塾員の推挙により評議員会を経て、社頭が決定する慣例で、概ね毎年春秋に行われた。社頭が空席の現在は評議員会で最終決定とされているものの、他は同様の方針で現在に至っている¹⁰⁾。

慶応義塾に卒業制度ができる明治7年にはすでに文部省に官職を得ている長谷川泰が、『名流列伝』において卒業生として扱われるとすれば、この「特選塾員」に選ばれたと推定できる。現に同書は、小幡篤次郎はじめ、多くの特選塾員を掲載しながら、彼らを含めて「卒業生」と呼んでいるのである。野依は「特選塾員」という制度の存在を十分意識せずに、「塾員」と「卒業生」を同視して、単に「出身者」「卒業生」などと表現したと考えられる。

慶応義塾では明治後期から昭和初期にかけてはほぼ毎年、「塾員」全員を記載する『塾員名簿』を刊行していた。それを確認すると、明治38~44年版まで長谷川泰の名が掲載されており、卒業生か特選かの別が明記されるようになる明治43年版以降には、「特36」すなわち明治36年特選と記されている。住所「東京市本郷区元町一ノ二」、職業欄は「医業」もしくは「医師」とあり、同姓同名の別人では無いことも明らかだ。『名流列伝』は明治42年の刊行であり、卒業生か特選かの別が記載されていない時代の『塾員名簿』に基づいて掲載者を選択したため、全員を一律「出身者」「卒業生」として扱っていたものと推定する。

それでは泰が特選されたのは、何故であろうか。

すでに述べた通り、特選された者は、①卒業制度の制定以前に義塾に在籍した者、②卒業制度制定後に義塾に在籍して中退し、引き続き義塾と縁の深い者、③教職員として義塾に貢献した者、④義塾の理念に深く共感しそれを社会で実践した者、といった形で、義塾と何らかの接点を有した者が選ばれ、本人の承諾をもって正式に「特選塾員」となった。このうち②の可能性は泰において

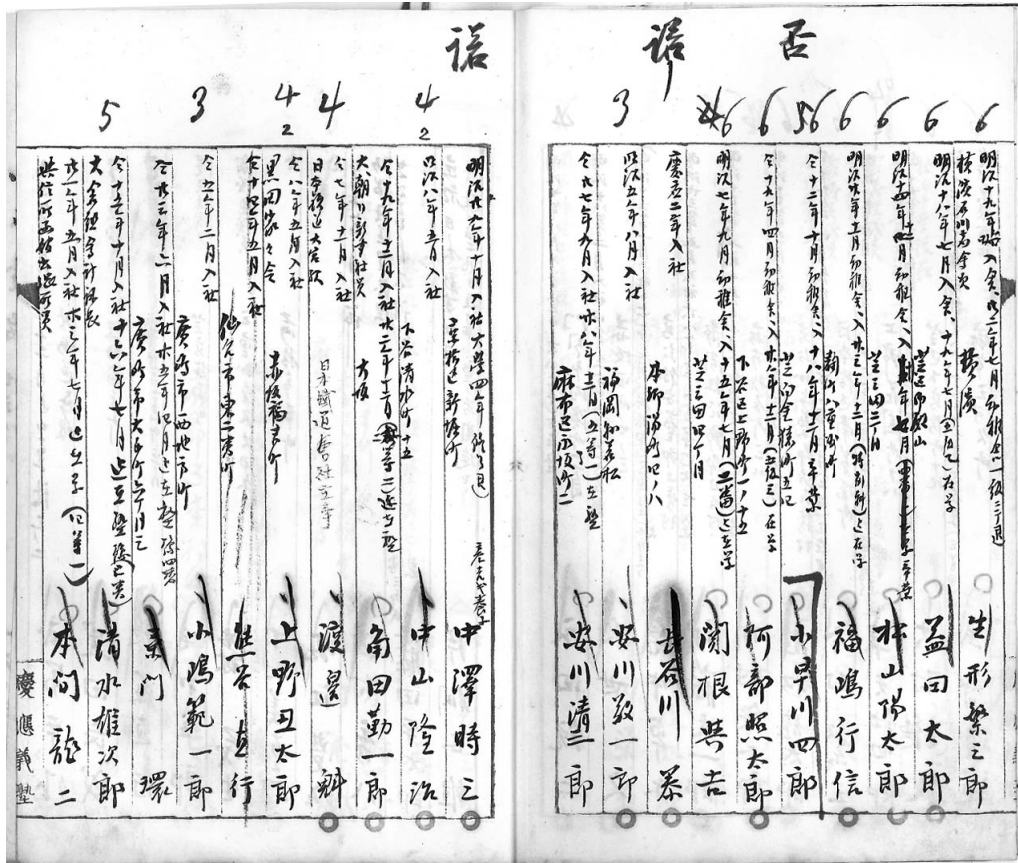


図2 特選塾員選出に関する書類 (A) 慶応義塾塾員センター蔵

は乏しいのは前述のとおりである。

筆者らは、慶応義塾の所蔵する特選塾員選出に関する書類の閲覧の機会を得、そこに泰が選出された際のものと思われる書類の現存を確認することができた¹¹⁾。

書類は「塾員候補者」と題された名簿2点であり、(A) 慶応義塾野紙に毛筆で記入されたもの(図2)と、(B) 蒟蒻版印刷のもの(図3)である。(A) は人名の順序が何に基づくか不明であるが、泰は67名中の中盤に名があり、「慶応二年入社」と明記されている。さらに名前に合点が打たれ、下部には○印の朱印、上部欄外に「諾」の字がある。(B) は「入社」の年代順に70名の人名が並んでおり、筆頭は柳本直太郎でその下に「慶応二年二月入社」とあり、2番目に長谷川泰の名があり、その下に「全」とある¹²⁾。

この他に「推薦文案」と題する蒟蒻版の文案も綴られており、この文面がこの名簿に名前のある人物にそれぞれ送付されて、特選塾員となる承諾を得たものと推定される。その文面は以下の通りである。

推薦文案

拜啓 愈御清康奉存候。陳バ今般本塾規約第四条ニ抛リ貴下にも塾員ニ御加入被下候様致度希望仕候間、何卒御承諾被下度、此段得貴意度、如此御座候。 敬具

月 日

社頭

、 、 、 、

、 、 、 、様

追而本文之義、御承諾被下候ハ、別段御回答を

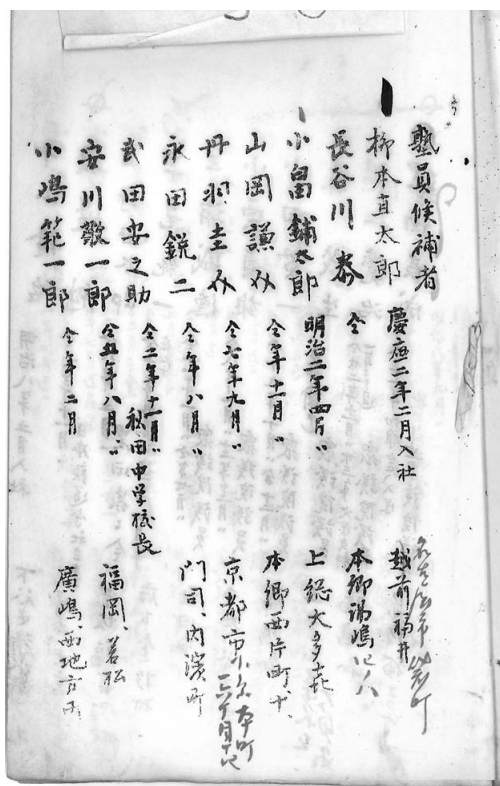


図3 特選塾員選出に関する書類 (B)
慶應義塾塾員センター蔵

煩はさず候へども、万一御差支も御座候ハゞ来ル何日迄ニ慶應義塾塾監局宛御一報被下度候。尚別紙規約一葉御覧ニ供候。

これらの資料を勘案すると、泰が慶応2(1866)年当時、慶應義塾に在籍していたと義塾当局に把握されていたことが、特選塾員選出の契機になっていることがわかる。

(A)の名簿上の幾人かには「×」「否」と書き入れがあり、それらの人物が塾員となることを拒んだことがわかる一方で、泰の覧には、わざわざ「諾」と記されている(諾の字は他にもう1名のみ)。このことは、通知を受け取って不作為であれば自然に承諾となるにもかかわらず、泰がこれを積極的に承諾する意思表示をしていたということの意味する可能性が高い¹³⁾。

ところで、この書類において泰は「慶応二年」に「入社」とある。「入社」とは、慶應義塾の社

中に加担するという意味で、すなわち入学を意味しているが、この事実を記録する、慶応2年当時の資料は慶應義塾に残されていない。当時の義塾に備え付けられていた「姓名録」(のちに入社帳と改称)と呼ばれる入学者の記名簿が唯一現存する塾生の在籍記録であるが、泰の名前はここにはない。ただしこの記名は厳密なものではなく、記名がなくとも在籍した人物が多数存在する¹⁴⁾。

泰が選ばれた明治36年の特選塾員は全部で43名おり¹⁵⁾、その中には実業家・茶人の野崎広太、実業家・劇作家の益田太郎(孝の次男)などいる。ここに松山陽太郎(松山棟庵長男)の名があることに注目したい¹⁶⁾。

いうまでもなく、松山棟庵は慶應義塾出身の医師で、三田の慶應義塾内に一時慶應義塾医学所を開設し、松山病院を開業した福沢諭吉の主治医であり、慈恵会医科大学や大日本私立衛生会の設立に参加したことで知られる。同時に特選された者の中に泰との関連を見いだせる人名は松山陽太郎以外見当たらないことから、棟庵に関連する人脈から、松山陽太郎とともに推薦された可能性が高いと推定される。

2. 長谷川泰の慶應義塾入社周辺

それでは、長谷川泰が慶応2(1866)年に慶應義塾(当時は単に福沢塾と呼ばれていた)に入学したことは、泰の生涯に対するこれまでの諸研究と矛盾しないだろうか。

長谷川泰自身は東京府に提出した済生学舎の「私立開業願」において次のように自らの略歴を記している。

安政三丙辰年ヨリ同四丁巳年マデ二年間、旧長岡藩鈴木弥蔵ニ付漢学修業。文久二壬戌年ヨリ慶応二丙寅マデ五年間、旧佐倉藩士族佐藤尚中ニ付医学修業。同三丁卯年ヨリ明治元戊辰年マデ一年間、旧幕府侍医松本良順ニ付医学修業。明治四辛未年ヨリ同七甲戌マデ四年間、独乙人繆児列児氏忽布満氏ニ付医学修業。¹⁷⁾

郷里を離れてからの勉学については、佐藤尚中、

松本良順の元で学んだことだけを記している。

実際はこれよりも複雑な経緯をたどったとされているが、『長谷川泰先生小伝』は、以下のように年代の記述がかなり不明確である。

長谷川先生〔佐藤〕尚中先生に就て学ぶこと五年、其天才は万人の認める処となつたが、更に学ばんが為め江戸に出て、伝手を求めて薩藩の英学塾に学ぶこと数年……更に松本順先生の許に医学を学んで居たが、一年ならずして維新の革命が起つたのである。……松本順先生は渡辺洪基等を従へて東北に走り幕軍の為め傷病兵の治療に従事するに至り、長谷川先生の学びつゝあつた幕府の西洋医学所は瓦解した。此際先生が松本先生等と行動を共にしたか、或は単独に郷里に帰って居たか詳らかでない……¹⁸⁾

『こころの母校一済生学舎小史』の年譜は、慶応2年の欄に「この年、薩摩藩、江戸に英学塾を開設。直後、泰、入塾す」「五月に幕府の西洋医学所に入所との伝もある」としている¹⁹⁾。

この点、唐沢信安『済生学舎と長谷川泰』は資料を丹念に用いて順天堂時代、医学所時代の年代を絞り込む材料を多く収集してある。これに従えば、泰は文久2(1862)年に佐倉順天堂に入門し、以後四年半にわたって佐藤尚中の下で学んだとされるが、慶応2年信州飯山藩出身の石田子常の書いた慶応2年の「順天塾社中姓名録」に「長谷川泰一郎」の名があり、また同年3月に佐藤尚中が自筆で41名の門人の名を記した「門人帳」の第二級に同じく「長谷川泰一郎」の名がある。この後の経歴には年月が定かでない部分が多いものの、泰はまず江戸に出て蘭医坪井為春の門に入り、坪井が薩摩藩の奥医師を務めていた関係から薩摩の英学塾に在籍したとされ、佐藤泰然に宛てて「此上は独乙学より英学相開可申候」と書き送っているという。さらに慶応2年5月には佐藤尚中の紹介状を持参して松本良順を尋ね、幕府の医学所に入所したとされる²⁰⁾。3月には尚中の元におり、5月までに坪井為春、薩摩の英学塾、幕府医学所と転々と移ろつたということになるが、

医学所が以後の勉学の拠点であつたと考えられている。

当時医学所に在籍していた教員及び学生について、泰と同時期に学んでいた石黒忠恵は次のように記している。

学科担当は、松本良順教頭自ら内科を教授し、次に教授坪井芳洲氏(名は為春米沢の人)で薬剤学を教授し、島村鼎甫氏(名は鼎岡山の人)が生理学を、石井謙道氏(名は謙備中の人)が病理学を、桐原玄海氏(名は真節信州の人)が解剖学を受持ち、助教授の方では、足立寛氏(通称藤三郎遠州の人)が蘭学理化学を、田代一徳氏(名は基徳今の義徳博士の養父)が蘭学と数学を受持って居られました。私は寄宿舎生の一人で、後に句読師といふ下級教官の一人になりました。

其頃医学所学生中の重立つた者は、渋谷彦一郎、福原代次郎、大沢謙二、土岐頼徳、中泉正、渡辺洪基、青木尚綱、福原有信、横井信之、長谷川泰の諸氏で、其中、福原、渋谷、渡辺の諸氏や私などが、蘭学の句読を教へる句読師といふ役目です。学課の中で一番時間を費したのは、内科、外科、薬学などの書物を読む事で、つまり読書が一番多くの時間を要したのです。²¹⁾

ここで、江戸の医学所と緒方洪庵の適塾人脈の密接な関係について考えてみたい。泰が医学所に入学した当時の頭取は松本良順であるが、その前任者は緒方洪庵であつた。大坂で適塾を主宰していた洪庵は奥医師に任命され、文久2年8月に江戸に到着、しかし翌文久3年6月10日に急逝した。江戸での洪庵の動静は「勤仕向日記」に記録されているが、残念ながらその中には医学所の日常がごく僅かしか記されていない²²⁾。しかし医学所では、『福翁自伝』などの記述でよく知られる適塾式の蘭学教育を行つたと伝えられ、洪庵死後に松本良順に頭取が替わると、良順がそれを全面的に改め、医学教育に軸足を移していくが、洪庵式に従う者との間に反目を生じたという。適塾を経て文久2年に医学所に入門した池田謙斎はこの様子

を次のように記述している。

此医学所にはいったからとて、別に医者に志したわけじゃなかった。唯此時分医者でなしに、洋学の塾でも開いてゐたものと云へば、甚だ寥々たるもので、当時私の聞いたのは福沢諭吉と村田蔵六の二人ばかりであった。所が此兩人共緒方の門人で、緒方は其大先生であったから、私は此人に就くべしとしたのじゃ。²³⁾

当時私らと一所に此医学所で学んだ友達は、今の足立軍医監、故田代軍医正などだったが、大分亡くなった人々が多い。それからあの資生堂の福原(有信)も同窓の学友だったが、石黒(忠恵)、長谷川(泰)、それに土岐(頼徳)なんといふ連中は、私が長崎へ行った後へ這入って来たのじゃった。緒方洪庵先生は其内なくなられたについて、其後の頭取に松本順君が来た。所が緒方の学派のものは、一時松本を嫌ったもので、松本も随分困ったことであつたらふ。なぜそうかといふと、元来緒方の方はむづかしい本ばかり読ましたもので、「ナチュラルキェンデ」といふ物理の大変にむづかしい文章や、それがすむとすぐにリセランドの「ヒシオロデー」を読ますといふ風。それも中は読まないで、むづかしい序文を読だものぢゃが、大阪の緒方の塾では、村田や福沢が塾頭の頃右のリセランドの序文が読めると、すぐに塾頭になれる資格のあつたものじゃそうだ。然るに松本の方はそうでない。そんなむづかしい本ばかり読むでも医者になる為にはならぬ。医者になるは、先づ理化学から、解剖生理、乃至は薬科、内科、外科の七科の学問をやらねばならぬといふので、全く教育の方針が一転した。医学教育の上からいへば、無論松本の方が本当の話であつたけれど、何分医学所には緒方の旧門が多いのじゃから、容易に松本に服しない。ナーニ松本は、緒方のように本がよめんから、あんなことを言ひ居るのじゃといふ批評で冷笑して居た。²⁴⁾

確かに適塾に学んだ福沢は『福翁自伝』の中で、

次のように適塾の教育の様子を書き残している。

殆んど塾中の原書を読尽して云はゞ手を空うするような事になる、其時には何か六かしいものはないかと云ふので、實用もない原書の緒言とか序文とか云ふやうな者を集めて、最上等の塾生だけで会読をしたり、又は先生に講義を願つたこともある。²⁵⁾

つまり、まずオランダ語の読解力を向上し、後日自力で読み、さらに地方で蘭学を普及していくための能力の習得が適塾及び洪庵時代の医学所では重視されていた。良順はその段階を終えて、本格的な医者の養成に踏み出した。すなわち「適塾式の教育を改め、基礎医学から臨床医学へと学ぶコースを定めた」のである²⁶⁾。

良順自身も自伝の中で「校乱」の小見出しをつけてこの件を詳細に書き残している。それによれば、福沢塾と適塾双方で学んだ足立寛、福沢の適塾の後輩で同じ中津藩出身の田代一徳が特に良順の方針に従わなかったが、良順は彼らを説得し迷いを解くに至った。

足立田代ノ服従スルヤ、其以下ノ者皆之ニ従ヒ塾中ノ囂々全ク治リタリ。然ルニ校事ニ従事スル俗吏等校中ノ静肅ヲ視テ訝リテ曰ク前緒方ノ校長タル昼夜会読輪読アリ。……頃日ハ寂寥只机上ニ書見スルノミ。午前午後三回ノ講義ニ出席スルノミ。学問ノ振ハザル故ナルベシト。予笑テ曰ク卿等騒々シキト生徒ノ注目ヲ注ギテ勉強スルトヲ弁ゼザルナリ。若シ喧嘩ヲ好マバ日々少年ヲ集メテ随意ニ乱舞セシムベシ、医学校ノ盛ナルハ其校ヨリ大医名家ノ出ルコト多キニアルナリ。卿等見ルベシ数年ナラザルモ必ズ大家輩出スベシ。何ゾ目前ノ囂々ヲ將ケン。²⁷⁾

かく足立や田代が抵抗したように、医学所の書生内には緒方の薫陶を受け、その門下であるという意識が強くあつたのである。適塾の学問系譜は、大坂の地で引き継がれると共に、江戸の医学所においても芽生え、それは短期間であつたにも

かわらず、その後の医学所に色濃く継承されていたのである。福沢が適塾で共に学んだ者達が医学所に在籍しているのであるから、相互に同門意識を抱くことは自然であったと推測され、さらに蘭学から英学へと視野を広げつつあった当時の若き学者たちにとって、文久年間には英学教育を開始したとされる福沢の塾にも出入りするようになったとするのは、無理のない推測ではないだろうか。

いくつかの具体例でこれをさらに補強しておきたい。医学所で教員を務めていた島村鼎甫は、適塾で福沢の先輩であり、福沢が江戸に出てきて間もない頃から盛んに行き来をしていた様子が『福翁自伝』に伝えられており、島村のわからないところを福沢が教えれば、慶応2年に福沢が『西洋事情』を刊行した際には、島村が「文章なども余程手伝った」といわれている。島村の元で蘭方医学を修めていた安藤正胤は、次第に英学の必要を感じて島村に相談したところ、福沢塾の名を挙げたので、それに従い築地鉄砲洲の福沢塾に入門したと語っている²⁸⁾。

島村と同時期に医学所の教員であった石井謙道は、適塾における福沢の後輩で、死して福沢が葬式の面倒を見るほど、生涯親密な交際があった²⁹⁾。洋学者仲間の桂川甫周の娘が語り残したところによると、福沢は維新前後は「始終」石井の家に入りし、福沢の『世界国尽』（1869）は「石井さんがわきから直したところもあるやうにききました」という³⁰⁾。初期の福沢著作は、こういった適塾以来の学者間の日常的な交流の中で洗練されていったこともわかるのである。

適塾出身ではなく、慶応2年頃には依然としてやや攘夷思想の影響を受けていたと自ら語る石黒忠憲は、福沢の死去に際して新聞記者に当時の様子を次のように語っている。

拙者は実歴年齢からゆくと、福沢翁には最も親しかるべしと思はるゝが、其实福沢翁とは頗ぶる交は薄いのだ、其訳は福沢翁が芝新銭座に塾を開かれた頃、親友が其塾に居ったから往来はしたが、拙者は其門人にはならぬ……³¹⁾

石黒でさえ「門人にはならぬ」としながら、福沢の塾には「親友」がいたので通っていたというのである。石黒は別の機会には次のように語っている。

私は斯くお話し、て来ると茲に恍として五十余年前の〔福沢〕先生の風格を思ひ浮べます。当時先生は鉄砲洲の奥平藩邸に私塾を開いて居られました。塾と申しても藩邸の長屋で至って僿末な座敷で塾生と云っても僅かに十数人に過ぎなかつたのであります。其頃私の知友足立寛君（これは緒方の塾で福沢先生が塾頭をした頃の出来の好い方の書生）だの渡辺洪基君だの云ふ連中が其塾へ出入して居った。其れ是れの連中に誘はれて私も其塾に参り、時には塾のお飯を喫べた事もあった。然し私は其の頃攘夷家の足を洗ったばかりの時で猶ほ腰には関の兼次の刀を帯し、大きな髻を紫の紐で結うて居る様な訳でした……³²⁾

ここでは足立寛と渡辺洪基の名前を挙げて、福沢の塾に出入りしていたと語っている。なお足立は福沢の塾の「姓名録」に記名がないが、「姓名録」の記入が始まる文久3年以前の安政6（1859）年の入塾で、当時塾生の年長者が担当した塾長を一時務めており³³⁾、渡辺は慶応元年11月5日付で「渡辺静寿」と記名している³⁴⁾。ちなみに後に泰の親友となる松山棟庵の記名は慶応2年11月である³⁵⁾。

ところで、松本良順は將軍慶喜に従って、慶応2年後半から3年にかけてはほとんど上洛して江戸の医学所を留守にする有様となり、生徒はごく少数となって、慶応4年正月頃には解散となつたとされている³⁶⁾。この時期に、実質機能しなくなった医学所から多くの学生が福沢塾に出入りしていたと考えられよう。ただし福沢も慶応3年1月より6月まで幕府軍艦受取委員の一員として渡米してしまい、残された塾生達が塾を守ることとなった。泰の長岡婦郷はこの頃のことである。

以上のように、医学所において長谷川泰の周辺にいた人物には、緒方洪庵の適塾の学統を継ぐ者

が多く、福沢との交際が日常的に親密な者、福沢塾にも入門している者が多数いた。松本良順の指揮による医学所の方針変更に伴い、多少の動揺があったとはいえ、その人脈は脈々と生きていたのであり、また蘭学から英学へと転ずる学生は、松本頭取時代でも、引き続き福沢塾へも自然に出入りしていたと考えられる。

この人脈は、維新後の大学東校、東京医学校へと連なるものであり、ここに適塾での福沢の親友長与専斎が加わり、長谷川泰の維新後の活動人脈が形成されていくのである。

またもう一点、慶応義塾には維新後、泰と同郷の長岡出身者が多く集まり、和歌山、中津と並んで慶応義塾に入学者が多い「塾の三藩」の一つに数えられた点も言及しておきたい³⁷⁾。旧藩主牧野鋭橋をはじめ、藤野善蔵、渡部久馬八、芦野巻、秋山恒太郎、名見耶六郎、小林雄七郎(虎三郎の弟)、城泉太郎、中島武藤太、外山脩造など、近代史上の諸分野にその名を残す人材が多く入塾した。また長岡洋学校を設立した三島億二郎は、入塾はしなかったが福沢と交流し強い影響を受けたと言われている³⁸⁾。

慶応義塾は、概して旧幕府方の人材の維新前後の拠点になった側面があったと言えよう。このように、医学所を取り巻く人脈は、長谷川泰が慶応2年に福沢の塾に一時在籍していたとの記録を補強しており、その事実も、明治期の医学界を巡る人脈をより広い時代の文脈において捉える上で、重要な意味を持つと言えるのではないだろうか。

3. 長谷川泰と福沢諭吉の思想

それでは、長谷川泰と福沢諭吉は、単に一時期泰が慶応義塾に在籍していたというだけの関係だったのであろうか。この点を、済生学舎と慶応義塾という、二つの私立学校の教育者・経営者としての両者の思想の近接性という点から考えてみたい。

(1) 学問に対する基本姿勢

まず教育の基礎を西洋の学問に置き、その実践の側面にも重きを置いた点である。泰は「医学は

経世済民の学であり、単なる治病の小技でない」とペランメエロ調で卒業生に演説したように³⁹⁾、単に高尚な学理を講ずるのではなく、一方で単に実用に偏するのでもない姿勢で学生の育成に取り組んだ。具体的な教育の特色は、外科手術及び診断演習実習を取り入れるなど、医術開業試験を視野に入れた実地の臨床技能教育にあった⁴⁰⁾。診断実地演習としては、当時珍しい産科模型演習を行っていた。これら臨床実習は、初期には、順天堂医院で行われていたが⁴¹⁾、その後は、明治19(1886)年に済生学舎付属病院である蘇門病院(初代院長 山崎元脩、明治21年より長谷川順次郎 病床数20床)で行われた。この実地演習修了者には図4のごとく演習項目ごとに指導教官の修了印のある卒業証が渡された。これらの臨床技能教育は、多くの学生が医術開業試験の合格を求めて済生学舎に入学してきた要因となったものと考えられる。

この姿勢は、空理空論を嫌い、高尚な学理も社会との関係性を重視する「実学」を尊重した福沢の思想と重なる。福沢は『学問のすゝめ』初編において、「一科一学も実事を押え、其事に就き其物に従ひ近く物事の道理を求て今日の用を達すべきなり」と、まず旧来の儒学に欠けていた日用普通の学問の必要性を説き、同時に自然科学を基礎とした学問そのものの深化も重視した。また学問の習得によって得た知見を社会で「口に言ふのみに非ず、躬行実践」することを、「慶応義塾の目的」として語ったことはよく知られている⁴²⁾。

他方、済生学舎は、早くから女子に正式に医学への門戸を開いていた点で特筆される。明治17年12月初めて女子医学生の入学を許可、高橋瑞子はその第1号となり、17年余りの間に130余名が女医となった。明治25年には東京女医学校(現在の東京女子医科大学)創立者となる吉岡弥生も済生学舎で学んだ。このように済生学舎は、我が国で初めて本格的に男女共学で医学を学ぶ学舎であった⁴³⁾。泰は済生学舎の女子学生が淑徳会を結成した際演説し、次のように語っている。

余は敢て男女同権の理を信ぜざるも亦た男尊女



図4 実地演習の卒業証（明治29年済生学舎卒業生長野県出身）

卑の説をも真理なりとは思はざるなり，世人は一概に婦人を卑めて其智力に於て，体力に於て自然に男子に劣れるものなりと為し女子を排斥して医業を公認すべきものに非ずと言ふが如きは最も謂れなきことなり，男女の二性，今日其智力に於て，体力に於て著しき等差あるは全く古来の慣習，遺伝性に由るものにして別に先天的，自然的区別のあるものに非らず……⁴⁴⁾

泰の女子教育論は，西洋医学に基づき人体を生理学的に理解する医師としての視野によって裏打ちされているといえよう（ただし明治34年には女子学生を放校にする）。

同じことは福沢諭吉にもいえ，さらに彼の場合は生い立ちや周囲の環境なども相まって女性の地位向上を訴える積極的な発言に結びついたことは，近年西沢直子『福沢諭吉と女性』において総合的に論証されている⁴⁵⁾。

また福沢は，明治20年3月の『時事新報』社説「女医学校の必用を論ず」において，女性に独立した生活を得させるために適切な職業の一つとして医業を挙げ，「患者の情感」から女性医師が「情を医」する側面も重視すべきこと，西洋医学

を学んだ「洋医」の不足によって治療費が高いつき，安価な漢方医がいまだに幅をきかせる原因になっていることから，「洋医」の増員のためにも女性医師の育成促進を主張した⁴⁶⁾。

(2) 文部行政への抵抗

長谷川泰は衆議院議員を務めた明治23年から27年の間に，歯切れの良い痛烈で理論的な言葉で，たびたび文部行政への批判，とりわけ私学への過度な干渉，圧迫への反対表明を行い，文部省廃止論も口にした⁴⁷⁾。今その幾つかの一節を『官報』掲載の会議録より書き抜いてみたい。

本員ハ能ク我帝国大学ノ楽屋ヲ知ッテ居リマス……政府委員ハ色々申スガ，政府委員ノ申スコトハ，一切ノ信用ハ出来マセヌカラ，諸君左様御承知ヲ願ヒマス。（24年12月23日衆議院本会議）

実ニ高等師範学校ナルモノハ無用ノ長物ト申サナケレバナラナイ，元来本員等ガ期スル所ハ，此ノ如キ必要デ無イ学校ヲ，政府ガオモチャ同様ノモノヲ建テ置クナラバ，此ノ大阪等ニアル

目下必要ナル官立学校ノ設立ニ供スル所ガアウト思ヒマス(明治24年12月10日衆議院予算委員会)

政府ハ何ヲ以テ社会中等以上ノ教育ノミニ国家ノカヲ費シ、実業的教育ハ何故ニ等閑ニ付シテ居ルノデアリマセウカ……政府ハ何ヲ以テ国家ヲシテ貧困ニ陥ラシメル教育ノミヲ之レ務メルノデアリマセウカ、斯ノ如キ教育ハ文明国ニハ無イ……殊ニ甚シイ此化物屋敷ナル、殆ド取賄、殆ドチャナイ絶対的行政ヲ取賄ノ目的ト遣ッテ居リマスル此化物屋敷ナル文部省ト薩摩海軍ガ最モ甚シイノデアル、何故政府ハ斯ノ如キ化物屋敷ノ退治ヲシナイカ……斯ノ如キ化物屋敷ヲ其儘置イテ我帝国議会ニ予算ノ協賛ヲ求めルト云フノハ実ニ驚入ッタ話デアル(明治25年12月23日衆議院本会議)

何ヲ以テ此際ニ文部省ヲ廃サヌノデアリマス、不要ナル文部省、有害無益タル文部省、此文部省何ゼ行政整理ニ方ッテ廃サヌノデアリマス(明治26年12月8日衆議院予算委員会)

中でも明治25年12月の演説は「文部省化物屋敷論」としてよく知られるものである。

福沢もこれと基本的には立場を同じくし、官立の学校を最低限に削減し、私立学校の育成を重視することを主張し続けた。一例として明治24年8月の『時事新報』社説を引用する。

元来我輩の持論に於て今の官立学校の教育の如く、単に銘々の生活を目的とするものは之を国家公共の費用に仰ぐを要せず、寧ろ人民の自由に任ずるを可とすれども、之に反して深奥蘊奥の学理を研究する真実の高等教育に至りては、之を国家の負担として国の学芸の淵源を養成保護せざる可らずと信ずるものにして、我輩の所謂国家教育とは即ち此辺の意味なれども、若しも当局者が従来ノ如ク単に自家の学校を保護するに急にして其の他を顧みざるときは、益々世論の反対を惹起して……或は諸官立学校

絶滅論となり、或は文部省廃止論となり、遂に或は国家教育をも云々するに至るやも知る可らず。⁴⁸⁾

当局者は此際断然方針を改め、国家の義務たる最下等の教育と文明の花たる最高等の学事とを政府の担任として、其他は現今の大学も又中学も全廃、以て民間に一任するは教育の爲め経世の爲め、頗る急要なる可きなり。⁴⁹⁾

ここに福沢は「深奥蘊奥の学理を研究」して「最高等の学事」を探求する役割を政府に容認しているが、その後に「全廃」すべきものとして「大学」を挙げていることから、これは帝国大学のことで無く、官立の学術研究機関のことと考えられる。これは明治32年に内務省衛生局長として長谷川泰が伝染病研究所の内務省移管を断行したことに通じる議論であろう(しかしその意図が大正3(1914)年の同研究所文部省移管で破綻したのも周知のことである)。

長谷川泰と福沢諭吉が協力した出来事として、明治25年から翌年にかけての伝染病研究所設立及び移転問題は有名である。泰は「大日本私立衛生会伝染病研究所補助ニ付建議」を帝国議会に提出し、満場一致で可決させ、また伝研移転に際して住民から猛烈な反対運動が巻き起こった時、「伝染病研究所ハ市内ニ置クモ妨ゲナシ」と題する5時間にわたる大演説を2度にわたって行った。この時、『済生学舎医事新報』に先立ち、福沢の『時事新報』が2日間にわたって4頁の別刷附録を発行して、泰のこの演説の全文を図表入りで掲載したことは、両者がこの問題で深い協力関係にあったことを示唆している⁵⁰⁾。

(3) 書簡にみる両者の関係

泰と福沢が、相互をどのように捉えていたかを直接示す資料は極めて乏しいが、書簡の中にお互いの名を挙げている例をわずかに確認できる。

福沢が泰に言及している書簡は2通ある。

1通は、相馬事件に関するものである。この事件は、慶応義塾の塾生であった旧中村藩主相馬誠

胤が統合失調症（推定）で癲狂院へ入院させられたことを、家臣の錦織剛清が、家族による不当監禁として告発した事件で、錦織から相談を受けた福沢は、自由党系の自由民権運動家として知られる法学者で、慶応義塾出身の馬場辰猪を紹介、事件に関して馬場に情報を伝える明治17年5月29日付の書簡中に泰が登場する。

昨日松山氏面会、長谷川泰氏の事を承合候処、松山氏も能く存居候。氏の考にもライトはブーアメンの方に在るとの見込、且長谷川は極めてヲネストに働き候よしに存候。⁵¹⁾

福沢が松山棟庵にこの事件の見解を尋ね、さらに長谷川泰の人となりを確認したらしい。初代癲狂院院長などを務めた泰は、警視庁の依頼により誠胤の診察をするなどこの事件に関係していた。この書簡は、福沢が棟庵から泰を信頼できる人物と聞いたことを示している。

もう1通は、福沢の北里柴三郎宛（明治26年7月14日）の書簡である。

昨日御話之辞表は、今朝少々閑を得たるに付、老生試に執筆致居候。出来候上は試に入御覧、長与氏とも相談致度存候。……唯今松山氏来り、昨夜長谷川へは面会不致、石黒へ逢ひ色々話致候得共、迎もまとまり不申、結局辞表は上策にして、今正に機会と存候。⁵²⁾

これは伝染病研究所の移転に際して発生した住民の反対運動への対策として、北里の「辞表」を福沢が試筆したことなどを伝えているもので、この時も松山棟庵を介して泰と福沢がやりとりをしていたらしい様子がうかがえる。

一方、同時期に泰が松山棟庵に宛てた書簡に福沢の名が登場するものがある（年未詳4月28日付）。

唯々不可思議ナルハ長与氏袖手傍観、反対の火焰をして今日の有様に至らしめたる一事なり。此件に付福沢翁は長与氏と特別之間柄故、定て

右被却の理由を承知之事と拝察仕候。福沢翁に御聞糺之上、右理由御分にも相成候ハ、一回御垂示被下度候。⁵³⁾

伝研移転反対運動に対する長与専斎の態度を読みかねていた泰が、長与の親友である福沢に、長与の真意を尋ねてくれるよう棟庵に依頼しているのである。福沢が、泰及び棟庵と同じように伝染病研究所移転の賛成者の側であることは前提になっているが、泰は福沢に直接連絡を取る間柄ではないと見受けられ、両者が親密であったとは考えられない。双方が棟庵を介して連絡をしていたことがわかる。

一方、明治29年に済生学舎に入学した野口英世は、恩師小林栄に宛てて在学生の様子を伝える手紙を記す中で、泰に言及し、次のように評している。

私立なるが故に、生活に絆縛与へる丈、其丈生み放し主義に御座候。左すれば生活之了見もいろいろにて、中には早やく免状を取り、髯をはやし妻を娶て車をかゝへて威張りたい、マー是種が十中の九分九厘中には早やく免状をとれば何々病院に行つて術をみがき、都合よかつたら院長にでも、又中にはよき家にでも養子となり政治をして見たえ、又は文学をやりたいと、それぞれ千種万別に御座候。兎に角軀の堅まりたる人は少なく御座候様被考申候。素より早速と数を以て利潤を制するのは長谷川氏の□付にして恰も福沢翁之一味に候。⁵⁴⁾

つまり、済生学舎の学生として同窓をやや冷ややかに見ている野口英世の視点では、泰と福沢は似た性格を帯びた人物として映じたということであろう。なかなか医術開業試験に受からない学生を沢山輩出し、学校経営者としての泰が儲かっていることを揶揄して、福沢の名を挙げているのである。福沢は盛んに実業論を説いたことから、「拜金宗」と批判されることがあり、ここではその意図で福沢を持ち出していると思われる⁵⁵⁾。いずれにしても泰を「福沢之一味」と描写している点は

興味深い。

以上はごく断片的な検討ではあるが、泰と福沢の思想の基本的な傾向に類似が多いことが見て取れるのではなからうか。

明治34年2月福沢諭吉が没した時、当時まだ塾員ではなく、済生学舎長であった長谷川泰が、麻布善福寺で営まれた福沢の葬儀に参列した記録が残っていることも付記しておく⁵⁶⁾。

おわりに

明治36(1903)年8月に突如として済生学舎を閉校した長谷川泰について、無責任との評価があることはやむを得ないといわねばならないが、非難の声を浴びていた泰に対して、同年11月に慶応義塾は特選塾員の資格を与えた。

済生学舎は慶応義塾にとって、数理を中心にした西洋の学問を普及するという点において、また官に対抗する私立であるという点において、同志というべき存在であった。学識を基盤に、私立の矜持の精神を併せ持つ。これが『名流列伝』の評価していた「慶応義塾出身」者としての長谷川泰の顔であり、これが福沢との共通点でもあると言えよう。

その一方で、泰が明治39年12月26日付をもって、正五位から従四位へと叙された際、内務省を経て内閣においてまとめられた功績書には、内務省衛生局長としての彼の公衆衛生に対する貢献だけが詳細に記され、済生学舎への言及は文字通り一文字もない⁵⁷⁾。叙位叙勲が衛生局長という官職に由来するものであるから当然ではあるが、彼が生涯の半分を捧げた医学教育は、「国家ニ勲功アル者又ハ表彰スヘキ功績アル者」(叙位条例第1条)に与えられる位階の理由としては言及にさえないものだったのである。

明治36年の「専門学校令」は、安定した財政基盤を私立学校に要求した。そのことが、長谷川泰の経済力の限界、そして彼の性格から親密な学校経営協力者が得られなかったことなどを表面化させ、済生学舎を閉校に追い込んだのである。慶応義塾ではその要求に継続的に応えていくための財団法人化への布石として、この時期より塾員括

大を図っていたと推定される。そしてそこに泰は加わったのである。

済生学舎廃校時の事情を「此時に当って尚私立の医学校を当局者に低頭しても持続せんとする馬鹿者ありや」「此政府の下に於て尚ほ私立医学校を持続せんとするは余の屑しとせざる所なり」と吐き捨て、「二十八年間培養したる一人息子〔済生学舎一筆者註〕を九寸五分で刺殺した」失意の友長谷川泰に対して、書簡と漢詩の交換をする親友松山棟庵がせめてもの慰めとして与えたのが、かつて一時的とはいえ在籍した慶応義塾の、塾員という資格だったと解釈できるのではないか⁵⁸⁾。

長谷川泰と慶応義塾を結ぶ細い線をたどることによって、適塾、医学所、そして慶応義塾を結ぶ人脈が、改めて浮かび上がった。本稿では、その後慶応義塾医学所や伝染病研究所、慶応義塾大学医学部へと繋がる人脈を必ずしも掘り下げられなかったが、この視点によって、維新前後の医学界人脈と、それ以外の近代教育史との領域との関係を、今一度検討する余地があると考えられるのである。

本論文は、第44回日本医学教育学会(慶応義塾大学医学部主催)記念シンポジウム「福沢諭吉『学問のすゝめ』に学ぶ医学教育」での発表⁵⁹⁾を基礎にして構成したものである。

註

- 1) 神谷昭典. 日本近代医学の定立—私立医学校済生学舎の興廃. 東京: 医療図書出版社; 1984. p.292.
- 2) 慶応義塾編. 慶応義塾百年史中(前). 東京: 慶応義塾; 1960. p.181-182. また慶応義塾史事典編集委員会編. 慶応義塾史事典. 東京: 慶応義塾; 2008. p.33 (徴兵令と慶応義塾), 福沢諭吉事典編集委員会編. 福沢諭吉事典. 東京: 慶応義塾; 2010. p.151-152 (私学圧迫政策と慶応義塾)なども参照.
- 3) 私立学校中徴兵猶予ニ関スル取調之件(1887年10月26日付). 普通第一種 特別認可学校書類. 東京都公文書館蔵.
- 4) 三田商業研究会編. 慶応義塾出身名流列伝. 東京: 実業之世界社; 1909. 凡例.
- 5) 筒井弥二郎. 野依秀市. 東京: 実業之世界社; 1969. 年譜 p.3. 野依を大学部理財科卒とする文献が

- あるが、実際は商業夜学校出身で後述の「塾員」の資格は持っていない。
- 6) 慶応義塾編. 慶応義塾百年史上. 東京：慶応義塾；1958. p.693以下（第四章維持経営の困難と打開）.
 - 7) 以下で言及する特選塾員は慶応義塾がほぼ毎年刊行していた『塾員名簿』による（慶応義塾福沢研究センター蔵）.
 - 8) 慶応義塾（1960: 31-32）.
 - 9) 土屋元作. 余が見たる福沢先生. 大阪：三和印刷店；1903. p.55-102.
 - 10) 現在総計30万人ほどの塾員中、5000人が特選塾員であり、毎年100人余りが新たに特選されている。慶応義塾史事典編集委員会（2008: 516-517）.
 - 11) 特選塾員関係書類 第壱号. 慶応義塾塾員センター蔵.
 - 12) この「全」は、この書類だけを見れば「慶応二年二月入社」と読むべきものと思われる。しかし（A）では、柳本がやはり「慶応二年二月入社」とある一方で、泰は単に「慶応二年入社」となっている。資料の状態から（A）に基づいて作成されたのが（B）と考えられることから、ここでは（A）を重視し、泰の入社を「二月」まで特定できるかには疑義を呈しておく。なお柳本は名古屋市長などを務めた官吏で、次註に示す『慶応義塾入社帳』に慶応2年2月12日付で記名があるものの、塾員になることを承諾しなかったとみられる。
 - 13) 名簿2点を詳細に検討すると、この一覧には明治36～39年までに特選された者の氏名があり、一度に打診せず徐々に通知が出されたか、もしくは一応の返答を得てから正式に特選としたものかと思われる。
 - 14) 慶応義塾150年史資料集編集委員会. 慶応義塾150年史資料集1. 東京：慶応義塾；2012. 凡例. なお「入社帳」は全5巻の影印版が刊行されている（慶応義塾福沢研究センター編. 慶応義塾入社帳. 東京：慶応義塾；1986）.
 - 15) （塾員の特選）. 慶応義塾学報 1903; 71: 81-82. ここでは筆頭に泰の名前が掲載されている。その名前のみ列挙すれば以下の通りである。長谷川泰、中沢時三、松山陽太郎、野崎広太、中村太郎、益田太郎、坂倉謹次郎、上村秀八、久世久、片桐正雄、阿部照太郎、武田安之助、上野春平、本間竜二、友金勝蔵、伊藤文一郎、久保田貫一、永田鋭二、清水雄次郎、小島範一郎、藤田平太郎、大村徳敏、三浦盛徳、泉孝三、中山隆次、植松竜太郎、早矢仕四郎、堀江覚治、福田禎輔、吉田栄石、小栗貞雄、和田辰二郎、小田寛一、木下玄三、福島行信、今村繁三、丹勝吾、角田謹一郎、巽孝之丞、桑門環、下村善右衛門、武智直道、荒川巳治。
 - 16) 松山陽太郎は明治6年生まれ。現慈恵医大出身。ドイツ留学を経て、慈恵医大教授（内科）、松山病院院長。昭和18年没。全松山家のしほり。私家版；1968.
 - 17) 私学開業願（明治8年12月24日）。東京都公文書館蔵。
 - 18) 山口梧郎（1935: 21-22）.
 - 19) 日本医科大学同窓会史料収集委員会編. こころの母校一済生学舎小史一. 東京：日本医科大学同窓会；1986. 年譜.
 - 20) 唐沢信安（1996: 4-9）.
 - 21) 石黒忠恵. 懐旧九十年. 東京：博文館；1936. p.99-100.
 - 22) 緒方富雄. 緒方洪庵伝（第2版増補）. 東京：岩波書店；1977.
 - 23) 池田謙斎. 回顧録. 私家版；1917. p.6.
 - 24) 同上. p.10-11.
 - 25) 福沢諭吉. 福翁自伝. 福沢諭吉全集8. 東京：岩波書店；1970. 69.
 - 26) 酒井シヅ. 日本の医療史. 東京：東京書籍；1982. p.401.
 - 27) 松本順口授・窪田冒筆記. 蘭疇. 私家版；1902. p.29-30.
 - 28) 石河幹明. 福沢諭吉伝1巻. 東京：岩波書店；1932. p.218. なお小藤の福沢塾入門は慶応3年正月21日である。慶応義塾福沢研究センター（1986: 1・91）.
 - 29) 石河幹明（1932: 1・213-215）.
 - 30) 今泉みね. 名ごりのゆめ. 東京：長崎書店；1941. p.41.
 - 31) （石黒況斎翁の福翁談）慶応義塾学報 1901; 39（福沢先生哀悼録）：201.
 - 32) （石黒氏の福沢先生追懐談）慶応義塾学報 1911; 163: 81.
 - 33) 石河幹明（1932: 1・226-229）. また慶応義塾. 慶応義塾百年史・付録巻. 東京：慶応義塾；1969. 12. 前者には足立と田代一徳が福沢を訪ねたが外出中で、留守中に酒を飲んでしまう逸話がある。
 - 34) 慶応義塾福沢研究センター（1986: 1・56）. 渡辺は入門間もない慶応2年正月2日の深夜、福沢宅に侵入して正月の鏡餅を中身だけくりぬいて食べたことを明治22年の慶応義塾懐旧会の席上で白状した話が残っている。石河幹明（1932: 1・445-448）.
 - 35) 慶応義塾福沢研究センター（1986: 1・179）. なお同時期に同郷の和田義郎（のち慶応義塾幼稚舎の創立者）、小泉信吉（のち塾長）らも入塾している。
 - 36) 東京大学百年史編集委員会編. 東京大学百年史通史1. 東京：東京大学出版会；1984. p.80. また石黒忠恵. 四十年前の医学生. 東京医事新誌 1907. 1493, 1907.
 - 37) 福沢諭吉書簡集1. 東京：岩波書店, 2001. p.391-392（「福沢と和歌山藩」「福沢と長岡藩」の項）. また内山秀夫. 福沢諭吉と長岡藩. 東京：慶応義塾大学, 2000 参照.
 - 38) 福沢諭吉事典編集委員会（2010: 580-581）.

- 39) 長谷川泰. 明治29年9月27日済生学舎卒業式に於いて. 済生学舎医事新報 1896; 46: 901-921.
- 40) 志村俊郎・唐沢信安・殿崎正明・寺本 明. 医術開業後期試験問題と済生学舎の臨床技能教育. 日本医史学雑誌 2010; 56(2): 255.
- 41) 星野甚四郎. 長谷川泰小伝一併せて医学校, 順天堂を覗く一. 日本医事新報 1980; 2928: 61-64.
- 42) 福沢諭吉. 気品の泉源智徳の模範. 福沢諭吉全集 15. 東京: 岩波書店; 1970. 534.
- 43) 志村俊郎・唐沢信安・殿崎正明・岩崎 一・寺本明. 済生学舎講師 石川清忠と女子医学生の教育. 日本医史学雑誌 2009; 55(2): 154.
- 44) 女学生の美挙, 長谷川泰氏の演説. 読売新聞 (1893年10月19日). なお文中の「遺伝」はここでは, 先祖や地域などの代々の習慣による後天的な能力の意味で使っている語である.
- 45) 西沢直子. 福沢諭吉と女性. 東京: 慶応義塾大学出版会; 2011.
- 46) 女医学校の必用を論ず. 時事新報 (1887年3月26日付). なお時事新報社説については, 執筆者をどのように捉えるかが福沢研究において問題となっているが, この点については都倉武之. 時事新報論説をめぐる諸問題. 青木功一. 福沢諭吉のアジア. 東京: 慶応義塾大学出版会; 2011に記すように, 福沢が最晩年まで社説を統括していた事実を重視し, 全集への収録有無を区別せずに, いずれも福沢の思想の検討対象として引用する.
- 47) この問題については久木幸男. 1890年前後における文部省廃止問題. 横浜国立大学教育紀要 1985; 25: 105-126. 同. 19世紀末の文部省廃止論. 横浜国立大学教育紀要 1986; 26: 71-90.
- 48) 私立学校撲滅. 時事新報 (1891年8月16日付社説). 表題は文部省内に私立学校撲滅論がある, との意味で, しかもこの表題で長谷川泰が済生学舎において演説をなしたことから当時広まった言葉だという. 山口梧郎編. 長谷川泰先生全集. 東京: 長谷川泰遺稿集刊行会; 1939. P.356.
- 49) 官立学校撲滅. 時事新報 (1891年8月17日付社説).
- 50) 伝染病研究所は市内に置くも妨げなし. 時事新報 (1893年6月4日・6日付附録).
- 51) 福沢諭吉書簡集4. 東京: 岩波書店; 2001. p.149.
- 52) 福沢諭吉書簡集7. 東京: 岩波書店; 2002. p.257.
- 53) 慶応義塾福沢研究センター蔵 (コピー). 鈴木要吉. 松山棟庵先生伝. 東京: 松山病院; 1943. P.192にも掲載されているが, 誤読が多い.
- 54) 小林栄宛野口英世書簡 (1897年4月19日付). 野口英世記念館蔵.
- 55) 福沢諭吉事典編集委員会 (2010: 274, 764-765).
- 56) 慶応義塾学報 1901; 39 (福沢先生哀悼録): 23.
- 57) (長谷川泰特旨叙位ノ件) 叙位裁可書 (明治39年・叙位巻30). 国立公文書館蔵.
- 58) 山口梧郎 (1939: 361).
- 59) 志村俊郎. 明治期における私立医学校の教育. 日本医学教育史. 坂井建雄編. 仙台市: 東北大学出版会; 2012.

On Tai Hasegawa and Keio Gijuku: Relations with Yukichi Fukuzawa

Toshiro SHIMURA¹⁾ and Takeyuki TOKURA²⁾

¹⁾Nippon Medical School, Medical History Study Meeting

²⁾Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

This paper discusses the relations between Tai Hasegawa and Keio Gijuku (now Keio University).

It had not been known that Tai Hasegawa, the founder of the Saiseigakusha Medical School, was associated with Keio Gijuku, founded by Yukichi Fukuzawa. But it is a fact that Hasegawa was selected as a special alumnus of Keio University in 1903. Based on some new documents, this paper shows that Hasegawa was enrolled at Keio in 1866.

Moreover, this paper discusses the fact that Igakusho, where Hasegawa was also enrolled in 1866, had a strong human network with Koan Ogata, the founder of Tekijuku in Osaka. That network overlapped with the network associated with Fukuzawa and connected Hasegawa to Keio.

Additionally, we refer to the conformity of the thoughts of Hasegawa and Fukuzawa, such as with regard to their views on academism and their longtime rivalry with the educational policies of Japanese government.

Key words: Tai Hasegawa, Yukichi Fukuzawa, Saiseigakusha Medical School, Keio Gijuku, Igakusho